

平成27年度水稲収穫量調査におけるふるい目幅見直し結果等について

1 背景

昨年度の水稲の作柄に関する委員会において、「水稲収穫量調査の課題と今後の対応について」が取りまとめられ、平成27年度より、作況指数の算出に当たっては、生産現場の実感により近いものとするため、従来の1.70 mmベースから農業地域ごとに農家等が使用したふるい目幅を使用する等の見直しを行い、新たな取組みを行ったところである。

このため、平成27年度において実施した取組み結果と対外的な対応等について、委員会で出された意見を踏まえ、次のとおり概要を整理した。

2 委員会での意見とそれに対する本年度の対応**【意見】**

ふるい目幅を見直した場合に、作付面積や収量は前年値との比較を検討されているが、作柄の解説に当たる登熟や天候等の比較においては平年と比較を行っているため整合性がとれるように留意する必要があるのではないか。

【平成27年度における対応】

作付面積及び収穫量については前年産との比較で解説を作成したが、10 a 当たり収量については、文字情報による作柄の良否（例えば、「やや良」の559 kgなど）を追記するなど、利用者にとってわかりやすい説明となるよう工夫した。

【意見】

ふるい目幅を見直した場合に、これまでのようにもみ数確定期においても作況指数を公表できるのか。国民目線でみると従来と同じ時期に指数を示すことは重要であるが、正確な指数を出せるかどうかよく検討する必要があるのではないか。

【平成27年度における対応】

もみ数確定期における10 a 当たり収量の予測に当たっては、従来の1.70 mmベースによる予測をしっかりと行い、この結果を基に、過去の調査結果等からも検討を行い、農家等が使用しているふるい目幅ベースの予測を行った。

【意見】

稲作の技術水準の検討などをする場合に、地域によって収量基準のふるい目幅が異なっていると比較ができないため、ふるい目幅を見直した場合であっても、これまでの 1.70 mm 基準の平年収量との比較ができるように留意願いたい。

【平成27年度における対応】

1.70 mm ベースの作況指数を同じ資料内で記載すると、2つの作況指数が公表されることとなり利用者に混乱を招く恐れがあったことから、作況指数は農家等が使用しているふるい目幅ベースのみを公表した。

なお、これまでの収量基準との比較ができるよう、平年収量については、引き続き 1.70 mm ベースの値についても公表した。

【意見】

ふるい目幅を見直すことについて、しばらくの間は利用者に対して誤解を招かないようにその旨を公表物に記載するなど、周知徹底するための対応をとる必要があるのではないか。

【平成27年度における対応】

公表資料の随所において、作況指数は農家等が使用しているふるい目幅ベースである旨や、主食用の収穫量など 1.70 mm ベースのデータである場合は、それが利用者にも分かるように記載した。

また、地方組織を通じ、関係機関等に対して見直し内容を事前に説明するとともに、公表の都度、利用者にはわかりやすい丁寧な説明を行った。

3 対外的な反応等

○ 公表内容については、関係者からは現場実態に近いものになったと一定の評価が得られたり、おおむね内容の理解が得られた一方で、次のような意見もあった。

- ・ 収穫量の単収と作況指数の単収が異なるなど、2つの数値があるため分かりづらかった。
- ・ 地方では作況指数の方が関心が高いにも関わらず、1 ページ目に 10 a 当たり収量と前年差のみが記載されており不便だった。

- ・ 農家等が使用しているふるい目幅を農業地域ごとに設定したが、県別にみると現状と差がある場合もあるため、県別のふるい目幅で設定してもらった方が良い。
- 玄米品位分析については、新たなデータを公表することに対して一定の評価が得られた。
なお、本年度は被害が大きくなかったが、米価に影響を及ぼす可能性もあることから慎重に対応してもらいたいとの意見も一部であった。
- 10 a 当たり玄米重の分布状況の公表については、収量水準のバラツキがわかりやすいなど、説明の際の補助データとして関係機関等から好評を得た。